

## 「経営を科学する」

北海学園大学 経営学部  
大平義隆

## &lt;科学とは&gt;

仮定 1 科学は人の行動の産物

仮定 2 人の行動は、人の生命維持で、緊張緩和として生じる。

= 不可思議さへの疑問、存在の正しい見極めへの欲求、客観的な確かめ欲求が必然的に発生。

= 対象の、客観的な、疑問解決を、既存の「科学」と類似するため、同じものとする。

## &lt;社会科学とは：経済活動と会社&gt;

仮定 3 人には生命維持が必要。この人と人の交換（個と個の便益の交換）は、経済活動のことだ。

仮定 4 個の交換に生じる緊張の緩和から、効率化の工夫、集団の利用、そして会社の工夫、等が生じる

仮定 5 人の行動は相互作用で、一般の解釈である相互作用を社会的行為とする考えと、同じと考える。

仮定 6 相互作用は、必然的に緊張を発生し、緩和が必要で、これを既存の「社会科学」と考えることができる。

## &lt;社会諸科学&gt;

仮定 7 経済理論では、個と個の便益の交換の個は、(限定された) 合理的な個で、交換には緊張が生じる

仮定 8 経済活動の緊張緩和の視点から、現状を解釈することができる。

①利己的な個の交換の緊張緩和として、ルール（法律）、と維持（行政）が生じる。

②経済活動が生じている全体の維持（政治）、が生じる。

③緊張そのものを低下させる行為（教育）、が生じる。

## &lt;経営とその学&gt;

仮定 9 個と個の便益の交換としての、経済活動の緊張緩和で、会社が生じ、緊張が生じる。

①古典理論：個人（投資家）は、会社という一か所に人を集めて分業し契約する仕組みを作り利用する。

ここで重要になった作業は「マネジメント」だ。従業員が結果を出しているかの確認をする

この段階では、個と個の便益の交換で、「経営は経済活動の一領域」と言える。

仕事で考えると、目標は仕事を出す個人と受ける個人と、同じではありません。目標の二重性だ

②会社は、環境の変化が激しくなると、会社目的（仕事）を変更しなくてはならない

会社目的（仕事）の受容は契約で決まっているため、変更が必要になる。

→変化が激しくなると、変更の受け入れは、目標の二重性により、難しくなる。

③新古典的理論：会社は、一か所に人を集めるため相互作用(非公式組織)が生じる。→離反的となる。

④近代理論：目標の二重性と会社離反性という課題を、解決しようとしている。

バーナードは、非公式組織を我々意識と把握し、会社目的を我々と被らせ受容できると考えた。

仮定 10 バーナードの、緊張緩和の考えは、意識、欲求には、私(個)と我々(全体)がある、と考えた。

民主社会では、個優先のほかに全体尊重を行うと、不満の少ない良い会社になると思われる。

仮定 11 バーナードから、「マネジメント」は進化し、一方優先多方尊重型、ということが出来る。

この場合、会社という客観的な存在を、経営者や投資家と従業員は共有している。

この場合の交換は、個と個のそれぞれ目標による交換ではなく、個と個が我々意識を持つての交換だ。

我々意識を持つての交換は、経済活動の原理とは違います。進化したマネジメントは、狭義の経営学。